

保育者の保有する教員免許と研修に関する一考察

—幼稚園教諭・認定こども園保育教諭の教員免許上進を中心に—

A study of early childhood education teacher certification and in-service teacher training

— Focusing on the teacher license upgrading of kindergarten and Kodomo-en teachers —

塩路 晶子, 浜崎 隆司, 田村 隆宏, 湯地 宏樹, 木村 直子

SHIOJI Akiko, HAMAZAKI Takashi, TAMURA Takahiro, YUJI Hiroki and KIMURA Naoko

鳴門教育大学学校教育研究紀要

第 36 号

Bulletin of Center for Collaboration in Community

Naruto University of Education

No.36, Feb, 2022

保育者の保有する教員免許と研修に関する一考察 —幼稚園教諭・認定こども園保育教諭の教員免許上進を中心に—

A study of early childhood education teacher certification and in-service teacher training

—Focusing on the teacher license upgrading of kindergarten and Kodomo-en teachers—

塩路 晶子, 浜崎 隆司, 田村 隆宏, 湯地 宏樹, 木村 直子

〒772-8502 鳴門市鳴門町高島字中島 748 番地 鳴門教育大学
SHIOJI Akiko, HAMAZAKI Takashi, TAMURA Takahiro, YUJI Hiroki and KIMURA Naoko
Naruto University of Education
748 Nakajima, Takashima, Naruto-cho, Naruto-shi, 772-8502, Japan

抄録：本稿は、日本における保育者（幼稚園教員・保育所保育士、認定こども園保育教諭）の教員免許と研修に関して検討を行うことを目的としている。多くの保育者は、短期大学で養成されており、幼稚園2種免許を保有している。文部科学省は現在、2種から1種への教員免許の上進を進めている。また、専門職である保育者は、継続的に研修を受けて彼らの持つ専門性を向上しなければならない。本稿においては、幼稚園教員と認定こども園保育教諭に焦点化し、彼ら自身が教員免許の上進や研修についてどのように考えているのか、アンケート調査によって明らかにした。彼らはこれまで、生活・仕事の多忙や上進方法が分からなかったこと、上進の必要性を感じないことなどによって、教員免許を上進してこなかった。今回の研修によって彼らが上進しようと考えた理由は、管理職になるために1種免許が必要になったこと、近隣で研修が開催されたこと、専門性を向上させるため、といったことである。私たちは今後も、教員免許上進と研修を結び付けた有効なシステムを考えていかなければならない。

キーワード：幼稚園教員免許, 上進, 研修

Abstract : This paper aims to study early childhood education (ECE) teacher certification and in-service teacher training in Japan. In Japan, most ECE teachers are trained in junior college and hold second class teachers' licenses. The Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) recommends that ECE teachers hold upgraded licenses. ECE teachers continuously take training and certificate their professional abilities.

We study how ECE teachers who took license upgrade training consider their own license upgrade and teacher training. The questionnaire survey shows that teachers who have not upgraded their licenses until now were motivated by being busy at work and in life, not knowing how to upgrade, seeing no necessity in upgrading, and so on. Moreover, teachers' reasons for taking upgrade training include improving their professional ability, the necessity of having an upgraded license to become an ECE administrator, the fact that a training course was held near their home, and so on. We must consider expanding the useful system of teacher training and the related license upgrading process.

Keywords : early childhood education teacher certification, in-service teacher training, teacher license upgrading

I. 幼稚園免許状等と研修機会の現状

本稿は、幼稚園教諭免許状2種から1種への上進と、そのための研修や力量向上について検討を行うものである。日本における乳幼児期の保育は主に、幼稚園・保育所・認定こども園において行われているが、その保育を担うのが幼稚園教員、保育所保育士、認定こども園保育教諭である。本稿においては、幼稚園教員・保育所保育

士・認定こども園保育教諭を合わせて「保育者」と記載する。なお、保育者は専門職ⁱの一つとして位置づけられており、幼稚園、保育所、認定こども園において保育を行うには、幼稚園教員免許、保育所保育士資格が必要である。

教育職員免許法によると、大学での養成による場合は、幼稚園教諭専修免許状は、修士の学位と75単位、幼稚園教諭1種免許状は、学士の学位と51単位、幼稚園教

論2種免許状は、短期大学士の学位と31単位を取得することとなっている。また令和元年度学校教員統計調査によると、幼稚園教員の1%が大学院修了者、28.9%が大学卒業者、68%が短期大学卒業者となっている。幼保連携型認定こども園の保育教諭では、0.6%が大学院修了者、17.2%が大学卒業者、77.8%が短期大学卒業者となっている。一方で小学校教員では、4.9%が大学院修了者、88.1%が大学卒業者、6.6%が短期大学卒業者となっている。さらに、文部科学省による平成30年度教員免許状授与件数等調査結果によると、幼稚園専修免許状は207件、幼稚園1種免許状は18,223件、幼稚園2種免許状は30,892件となっている。小学校専修免許状は1,587件、小学校1種免許状は23,294件、小学校2種免許状は3,905件発行されている。つまり、小学校教員の多くは四年制大学で養成され、その多くは1種免許状を保有しており、幼稚園教員及び認定こども園保育教諭は短期大学を中心に養成され、2種免許状を保有する割合が高くなっていることがわかる。

ところで専門職としての保育者にとっては、その力量の向上のための研修が欠かせないものとなっている。研修は様々な実施主体が行っている。

保育士資格に種別はないが、保育現場におけるリーダー的職員の育成を目指して、厚生労働省がガイドラインを定め、都道府県を中心として、平成29年より保育士等キャリアアップ研修が開始されている。研修分野は「専門分野別研修」「マネジメント研修」「保育実践研修」であり、1分野あたり15時間で8分野の研修が実施されている。受講修了者には、修了書が発行される。この研修の実施に伴い「園長」「主任保育士」と「保育士」の間に新たに「副主任保育士」「専門リーダー」「職務分野別リーダー」が新しい役職として設置され、手当てが給与に加算されることになっている。

幼稚園教員については、平成14年に「幼稚園教員の資質向上について—自ら学ぶ幼稚園教員のために—」が調査研究協力者会議から報告書として出されており、幼稚園を取り巻く環境の変化に応じてその専門性を向上させることが求められている。そこで各教育委員会等において、初任者研修や中堅教諭等資質向上研修、10年経験者研修が実施されている。さらに幼稚園教諭免許状についての更新講習も実施されており、10年ごとに30時間の講習を受講し教員免許状を更新することが義務付けられている。これらの研修は、行政を中心とした公的機関によって行われるものである。また、全日本私立幼稚園幼児教育研究機構が「保育者としての資質向上研修俯瞰図」を提示し、研修ハンドブックを発行している。その他にも、園長会等の団体や、保育事業連合会のような連盟によっても、様々な研修が実施されている。さらに保育者にとって特に重視されているのは各園において行

われている園内研修であり、幼稚園教育要領解説や保育所保育指針解説にも保育者の力量向上のための園内研修の重要性が示唆されている。これらの行政を中心としない研修は、保育者の専門職としての自律性を保つ上で不可欠なものであるといえようⁱⁱ。

一方で、幼稚園教員免許等が専門職である保育者にとってその職能を表すものとして必要であり、2種免許を1種免許に上進することが努力義務となっている。小学校教員・中学校教員・高等学校教員等においては、1種免許から専修免許への上進が流れとなっているが、2種免許を持つ幼稚園教員・認定こども園保育教諭としては、まずは1種免許への上進が推進されている。

そこで養成大学等を卒業後に、幼稚園教諭2種免許状を1種免許状に上進するために、教員免許状の上進制度が設けられている。上進は、大学等において、科目等履修生や編入生となって、各都道府県教育委員会が定める必要な単位数を取得し、各都道府県教育委員会に申請することによって可能である。さらに、教員免許認定公開講座を受講することによって、単位を取得することもできる。大学での科目等履修生や編入生となるには、通信コースの場合もあるが、現職の保育者が職務に従事しながら、大学等の養成大学に通学することは容易ではない。また教員免許認定公開講座を実施している教員養成大学や教育委員会は数が少なく、令和2年度においては、10程度の大学等において実施されているのみである。

II. 研究目的

幼稚園免許状についての先行研究としては、内田千春ⁱⁱⁱが保育者の専門性を整理するとともに、幼児教育の現状をふまえ、保育者の養成教育について言及している。内田は今後の方向性をいくつか提案しているが、その中でも「保育者のキャリア・ラダーを明確にする」「専門職として高度化する」といった、研修とキャリアのあり方や、教員資格と保育者としての専門性の関係に言及している。一方でアメリカにおいては、2020年に保育者の資格・免許とその専門性が3つのレベルで分類して提示されている^{iv}。

また、保育者のキャリア形成については、野屋敷結らの研究^vがある。この研究においては、保育者に対するインタビューをTEMで分析した結果から、「保育に対する正の感情」「保育者周囲の社会的状況」といったことが、保育者を続ける契機として見出された。さらに力量形成をめざした園内研修についての先行研究としては、淀川裕美らのもの^{vi}などがあり、ここでは園内研修における保育者の学びが構造化されている。片岡元子^{vii}らは、園内研修と園外研修の往還型にデザインされた研修の手法やその有効性が明らかになっている。

そこで、本研究においては、幼稚園教員免許の上進と、研修に焦点化し、保育者自身は免許を上進することや力量形成のための研修についてどのように考えているのか、ということについて検討を行う。

Ⅲ. 研究方法

A 大学において開催された幼稚園教員免許状の上進講習の受講生に対して、自由記述形式を含んだアンケート調査を実施した。A 大学の講習の開講科目は、「幼児と健康」「幼児と人間関係」「保育内容（言葉）」「保育内容（環境）」「保育内容総論」「教育心理学（発達心理を含む）」「幼児教育課程論」「教職論」「教育相談論」「幼児理解と保育実践の心理学」（10 科目 10 単位）である。講習終了時に調査用紙を配布し、郵送にて返送してもらった。配布数は 18 通、回収率は 88.9% である。調査期間は 2020 年 12 月である。質問項目は、上進講習を受講したきっかけや、保育者の力量形成について、多肢選択式項目と自由記述の形式を合わせて作成した。回収した質問紙の中で、自由記述の回答については、ラベルを付し、カテゴリー分類を行った。

Ⅳ. 結果と考察

1. 回答者の属性（単位は人）

回答者の属性は以下の通りである。現在の所属先（図 1）は、幼稚園と認定こども園がちょうど半数ずつであった。認定こども園は、平成 18 年から導入された新しい施設形態であるが、保育教諭は幼稚園教員免許状と保育

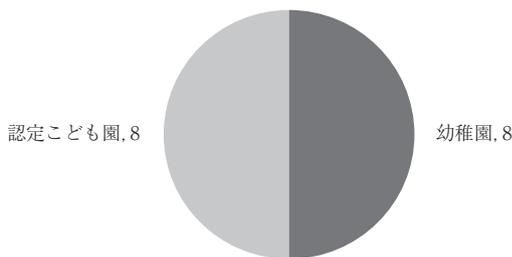


図 1. 現在の所属先

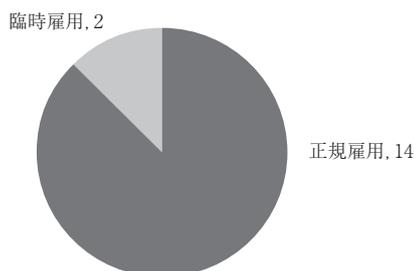


図 2. 現在の雇用形態

士資格の両方を持つことが必要であるため、幼稚園教員免許状の上進の対象となっている。また、現在の雇用形態（図 2）は多くが正規雇用であった。

職場での役職等（図 3）は、半数近くが園長・所長や副園長・副所長の管理職であった。最終学歴（図 4）としては、短期大学と専門学校が多数であった。保育経験年数（図 5）は、講座の募集時の受講生の経験年数を主に 12 年以上としていたこともあり、回答者全員が 10 年以上となった。また 21 年以上の保育経験年数の回答者が半数以上となった。

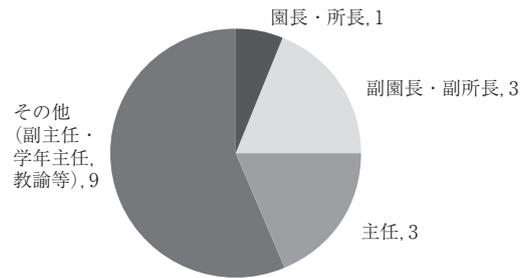


図 3. 職場での役職等

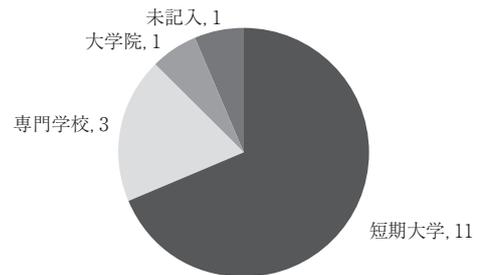


図 4. 最終学歴

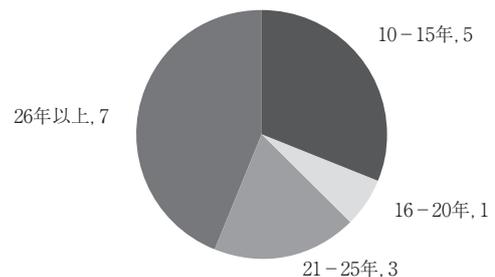


図 5. 保育経験年数

保有する免許・資格（図 6）としては、講座の性質上、全員が幼稚園教諭 2 種を保有していた。さらに保育士資格を保有する人も多数であった。

2. 幼稚園免許認定公開講座や研修について

幼稚園 2 種免許状をこれまで上進しなかった理由（図 7）についてたずねたところ、まず「仕事や生活が多忙であった」「上進するの必要性を感じなかった」という回答が多かった。短期大学等において 2 種免許取得後、保

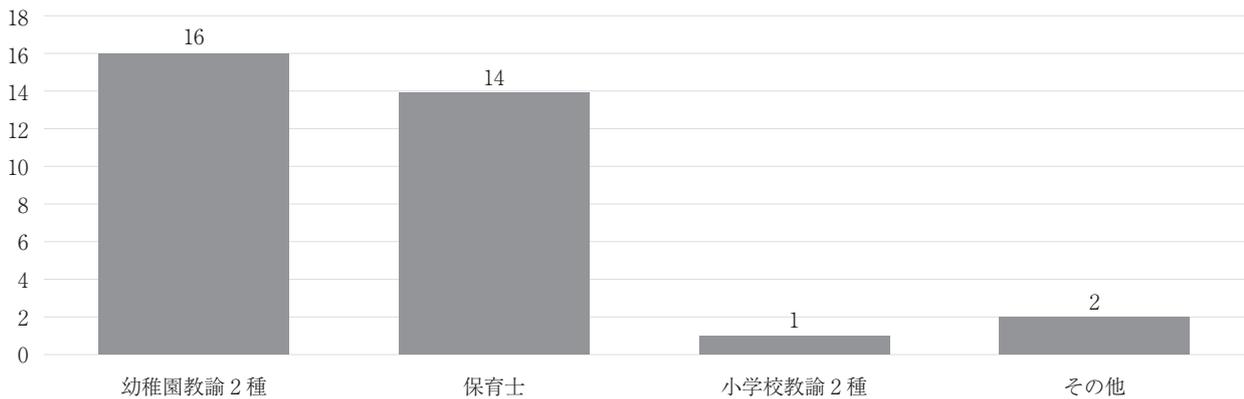


図 6. 保有する免許・資格（複数回答）

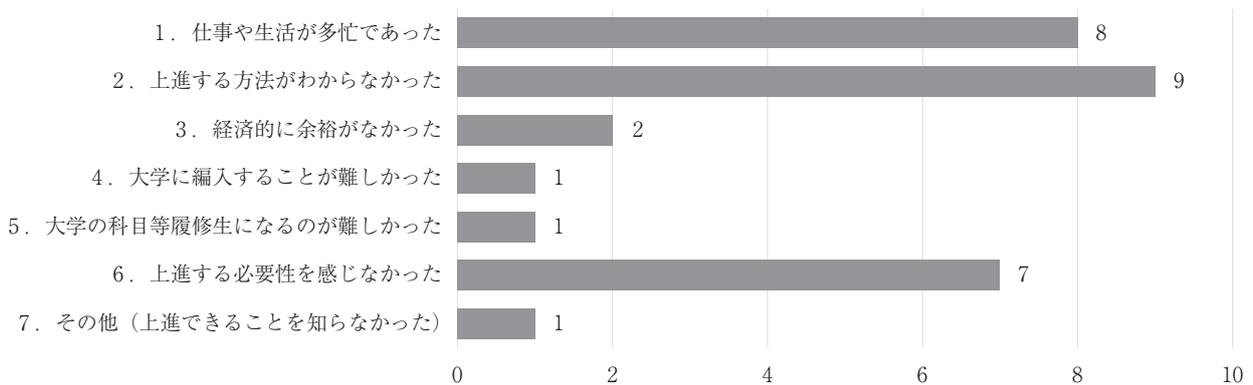


図 7. 幼稚園免許状をこれまで上進しなかった理由（複数回答）

育者として日々の保育に取り組み、公私において毎日の多忙な時間を過ごしてきたことがうかがえる。回答者は10年以上の人が9人、26年以上の人が7人と、長い保育経験年数を持つ人ばかりであるが、日々の保育の中では2種免許を1種免許に「上進する必要性を感じなかった」ということになる。一方で、「上進する方法がわからなかった」という回答も多かったことから、所持している教員免許を上進する方法が十分に保育者に周知ができていない、ということになる。回答者は、これまでも中堅教諭資質向上研修等、様々な研修を受講してきていると思われるが、教員免許を上進するというには結びついていない。

今回の上進講習を受講した理由（図8）としては、「園長等の管理職になるために免許上進が必要だから」が挙げられた。市町村や園によっては、園長等の管理職を目

指すときに、幼稚園教員免許1種が必要な場合があり、回答者は長い保育経験をもっているため、このようなニーズが生じたと考えられる。さらに「居住地の近く（行くことが可能な地域）で講座が開催された」「無料だったから」という理由も挙げられている。現職の保育者の多忙さを考えると、上進講習が身近で開催されることがアクセスの向上を生むため重要である。受講理由の中で最も多かったのは、「保育の力量向上の研修のため」である。さらに「その他」の回答としては、免許更新講習による更新ではなく、時間数の多い上進講習をあえて受講して上位免許を取得することを目指したり、研究大会の勉強のためといった理由も挙げられており、自らの保育の力量を向上させるために研修を受講したいという保育者の熱意を感じるものである。

さらに、研修についての考えとしては、回答者の中に

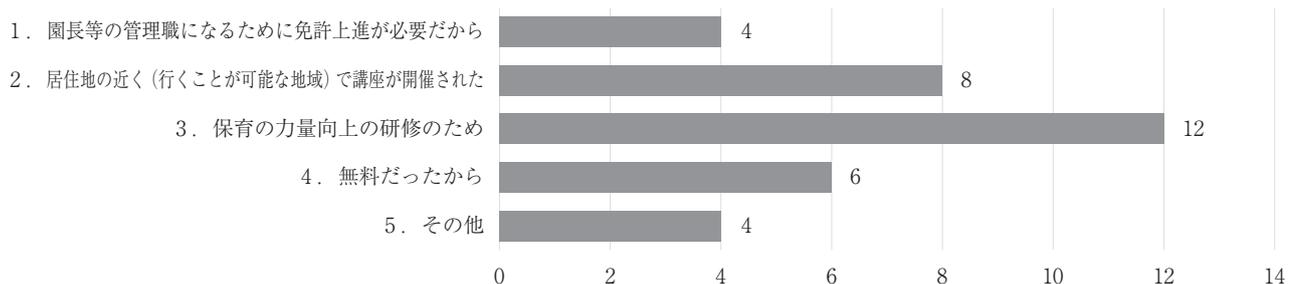


図 8. 受講の理由（複数回答）

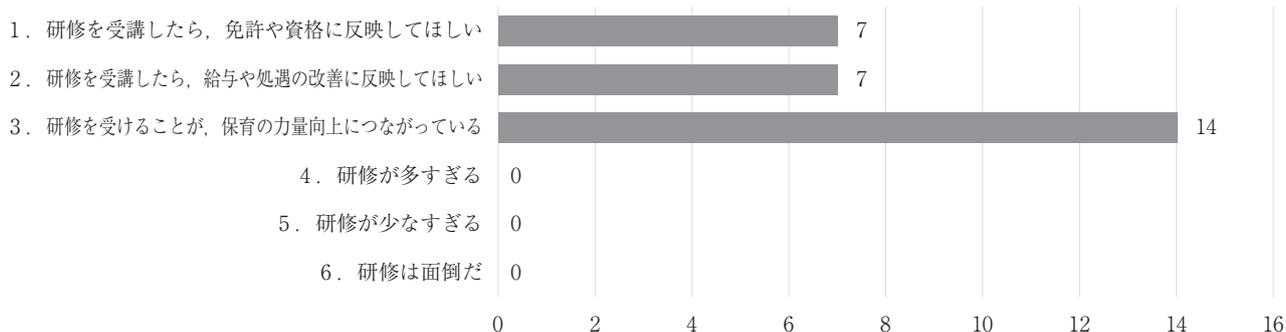


図9. 研修についての考え（複数回答）

は研修について「面倒だ」や「多すぎる」、「少なすぎる」といった考えは見られなかった。むしろ、「研修を受けることが、保育の力量向上につながっている」といった前向きな捉えが多かった。同時に、「研修を受講したら、免許や資格に反映してほしい」「研修を受講したら、給

与や処遇の改善に反映してほしい」といった意見も見られた。研修の受講により身につけている力量が免許・資格として明示化されることや、それに連動した処遇の改善がのぞまれている。

表1. 保育者の仕事を継続する動機

ラベル	小カテゴリー	大カテゴリー	
幼稚園へのあこがれ	保育者になりたいという小さいころからの夢	保育者になりたいという小さいころからの夢	
保育所または幼稚園の先生になりたいという小さいころからの夢(2)			
毎日楽しい	仕事の楽しさ	仕事は自分に合っていて、好きで楽しい	
仕事が好き			
自分に合っている仕事			
体を動かすことが好き	自分に合っている仕事		
子育ての経験を活かせる	子育ての経験を活かせる		
この仕事が好き(2)	この仕事が好き		
子どもが好き(2)	子どもが好き		
子どもとかかわることが好き(2)	子どもとかかわることが好きで楽しい		子どもとかかわりの楽しさや喜び
子どもとかかわることが楽しい			
子どもとかかわることが面白いから続けている			
子どもの笑顔を毎日見る喜び(2)		子どもの笑顔を毎日見る喜び	
子どもから好かれる喜び	子どもから好かれる喜び		
人とかわることが好き(2)	人とかわることが好き	人とかかわりが好き、職場の人間関係の良さ	
職場の人間関係のよさ	職場の人間関係のよさや悩み		
人間関係での悩み			
やりがいを感じる(3)	やりがいを感じる	子どもの成長を支援することができる喜びややりがい	
興味を持つことができる	子どもの成長を支援できる		
子どもの成長を支援できる(2)			
子どもと一緒に考え工夫する楽しさ	子どもと一緒に考え工夫する楽しさ		
子どもの成長を見ることができる喜び(2)	子どもの成長を見ることができる喜び		
子どもの心の成長を見ることができる喜び			
子どものために優先に考えるこの仕事に魅力	子どものために優先に考えるこの仕事に魅力		
行事後の達成感	行事後の達成感		保護者と子どもの成長を喜び合える
子どもの成長を保護者と喜び合うことができる	子どもの成長を保護者と喜び合う		
保護者から感謝される喜び	保護者から感謝される喜び		
保護者からの言葉のうれしさ			
子どもと一緒に学び成長(2)	自分自身が保育者として成長し続けることができる	自分自身が保育者として成長し続けることができる	
以前より余裕が出て仕事やりやすくなってきたことを実感			
自分もつ力を保育で発揮できるようになる（自分の成長）			
自分自身が保育者として成長し続けることができる(2)			
仕事は生活のためでもある	仕事は生活のためでもある	仕事は生活のためでもある	
自分の経験を若手に伝えたい	自分の経験を若手に伝えたい	自分の経験を若手に伝えたい	

表2 保育者の力量や専門性の向上についての考え

ラベル	小カテゴリー	大カテゴリー
研修は必要(2)	研修の大切さ	研修の大切さ
研修は大切(2)		
一種上進講習によって学びの機会が増える		
日々の保育に追われ時間がない(2)	日々の保育に追われ時間がない	
学んだことを実践で生かすことができる(2)	学んだことを実践で生かすことができる	研修の意義
自分の専門分野を見つけ勉強し、活かしたい		
知っている知識を改めて学ぶことで、実践につなげることができる		
知識と実践がつながる研修が、専門性の向上に必要		
研究保育をすることによって、自分の保育を振り返る良い機会	研修によって自分の保育を振り返ることができる	
自分を見つめなおすことが必要		
研修（講習）によって、多くを学び、自らの保育を見直し、保育に活かすことができた		
研修により、自分に向き合うことができる		
研修により理論を学ぶことができてよかった	研修で理論を学ぶ重要性	
特別支援教育や視聴覚教材からの学び	特別支援教育や視聴覚教材からの学び	
学ぼうとする姿勢の大切さ	これまでの知識・技術に満足せず、時代に対応した新しいことを学ぶ必要	保育者としての専門性を向上させるために必要なこと
子どもや保護者の多様化に 대응できるように、保育者自身が力量形成・専門性の向上が必要		
これまでの知識・技術に満足せず新しいことを学ぶ必要		
変化の激しい時代の子どもたちを保育するために保育者も学ぶ必要		
経験があっても専門性の向上は必要で、研修は必要		
考え続けることが自分にプラスになる		
考え続けることが人の役に立つことに直結している	考え続けることが人の役に立つことに直結している	
研究保育において他の先生の保育を見ることによる学び	職員の協働性の大切さ、お互いからの刺激による力量の向上	保育者としての力量を向上させる職員同士の協働性
保育の力量はひとそれぞれ違う		
全職員の協働性やチームワークをはかるリーダーシップの重要性		
職員の協働性の大切さ、やりがい		
保護者支援や若手保育者のサポートを通して自分自身も向上		
同僚からの刺激、附属幼稚園や大学教員からの知識・技術を知ることの大切さ		
専門性とは、「環境を通して幼稚園教育において育みたい資質・能力を遊びの中で育むことができること」	専門性とは、「環境を通して幼稚園教育において育みたい資質・能力を遊びの中で育むことができること」	保育者としての専門性についての考え
専門性とは、「肯定的な幼児理解、記録を取り保育者の援助や環境構成のあり方について考えられること」	専門性とは、「肯定的な幼児理解、記録を取り保育者の援助や環境構成のあり方について考えられること」	
専門性とは子どもを保育の中心に考えること	専門性とは子どもを保育の中心に考えること	
専門性とは保護者に本当に大切なことを伝えることができること	専門性とは保護者に本当に大切なことを伝えることができること	
保育の質を高めることの重要性	保育の質を高めることの重要性	
知れば知るほど難しい仕事	知れば知るほど難しい仕事	

3. 保育者の仕事を継続する動機について

次に保育者の仕事を継続する動機について、自由記述形式で回答してもらった。自由記述にラベルを付けて、カテゴリー分類すると、表1のようになった。大カテゴリーとしては、「保育者になりたいという小さいころからの夢」「仕事は自分に合っていて、好きで楽しい」という、保育者という仕事に対するポジティブな感情が見られた。

さらに「子どもとのかかわりの楽しさや喜び」「人とかかわりが好き、職場の人間関係の良好さ」「自分の経験を若手に伝えたい」といった人間関係の良さや、保育者自身が人とかかわりに前向きに取り組むことができることも、保育者の仕事継続の動機として挙げられて

いる。「子どもの成長を支援することができる喜びややりがい」「保護者と子どもの成長を喜び合える」という保育者の喜びややりがいが、仕事の継続の動機の中核になっていると考えられる。また、「自分自身が保育者として成長し続けることができる」という仕事を通じて自分自身が成長していくという実感も、仕事継続の動機であり、この動機を支える際には、研修が必要不可欠であると考えられる。

4. 保育の力量や専門性の向上について

次に保育者の力量形成や専門性について自由記述形式で回答してもらったところ、表2のように整理することができた。「研修の大切さ」「研修の意義」「保育者とし

での専門性を向上させるために必要なこと」「保育者としての力量を向上させる職員同士の協働性」「保育者としての専門性についての考え」という大カテゴリーに整理することができた。

「研修の意義」の具体としては、「学んだことを実践で生かすことができる」「研修によって自分の保育を振り返ることができる」といったことが挙げられている。また、「保育者としての専門性を向上させるために必要なこと」としては、例えば、「これまでの知識・技術に満足せず、時代に対応した新しいことを学ぶ必要」と考えている。保育経験の長い回答者たちであるが、研修から理論を学び新たな知識を得たり、そこから自らの保育を振り返るといった省察を深めようとしていることがわかる。さらに保育者としての力量を向上させるためには、職員同士の協働性を重視していることがわかった。また「保育者としての専門性」とは、「遊びや環境を通して子どもの力を育てていくこと」という幼児教育の根幹にかかわる事項が挙げられている。

5. 教職大学院への進学について

教職大学院では、教員としての専門性をさらに高める教育を行っており、小学校教員・中学校教員・高等学校教員等は、県教育委員会から研修として派遣される場合も多い。しかし保育者は、幼稚園教員対象の無給の休業制度を除いて、教育委員会等からの派遣のような制度がない場合が多い。そこで教職大学院への進学についてどのように考えているか質問した。

その結果、図10の通り、大学院での学びに興味がある人が半数いることがわかった。これは保育者としての専門性を高めるために研修の重要性を認識していることを如実に反映している結果である。しかし、教育委員会等からの研修派遣がない保育者としては、現職のまま大学院に通うためにはどのような形態であれば通学できるか質問すると、図11の通り「オンラインと対面の組み合わせ」といった回答が多かった。同時に、「休業制度

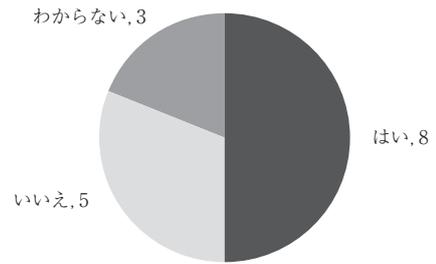


図10. 大学院で学ぶことに興味はありますか？

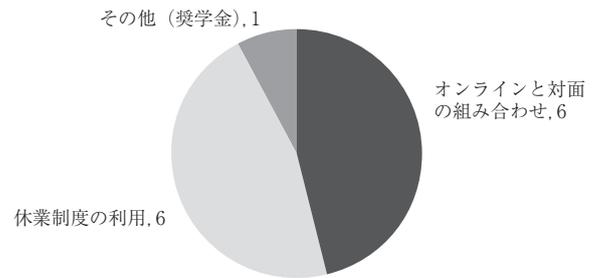


図11. どのような形態なら大学院に通学可能だと思いますか？(複数回答)

の利用」も選択肢として多く選ばれていることから、保育者も小学校教員等と同じように、現職のまま教育委員会等から研修派遣される制度のニーズもあると考えられる。

さらに大学院で学んでみたいこと(図12)としては、「幼児の心理」「発達障害のある幼児への支援」といった専門的知識へのニーズが高かった。さらに、「保育のカリキュラム・マネジメント」といった新しく改定された要領の内容への理解を深めることも求められている。保育経験の長い人が多かったため、「園の運営や保育の人材育成」を学びたいというニーズもあり、免許を上進して園長等の管理職になっていく保育者にとって必要なことである。また、「鳴門教育大学附属幼稚園での保育研修」については、保育についての最新の理論や知識を保育実践としてどのように具体化しているのか、それを実際の

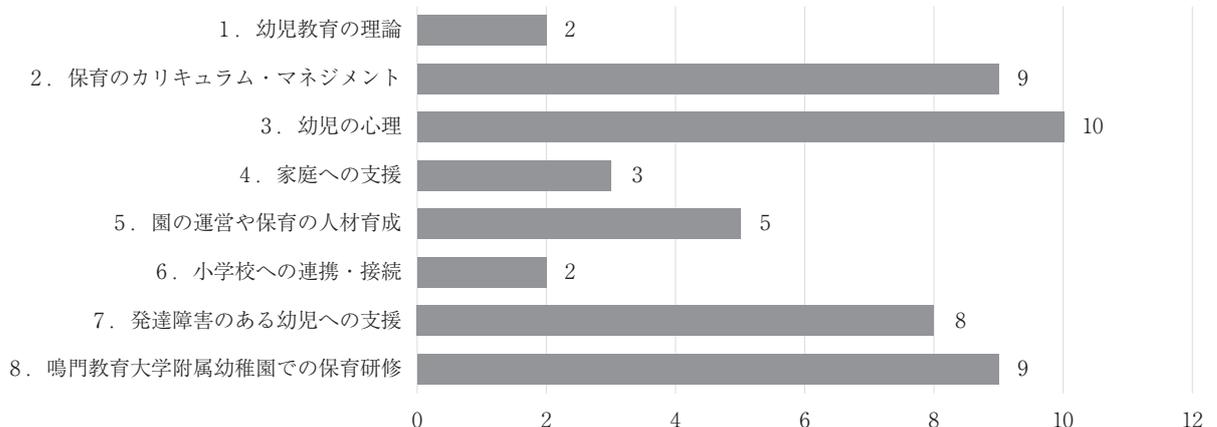


図12. 大学院で学びたいこと(複数回答)

保育研修を通して学びたいと考えていると思われる。

V. まとめと今後の課題

保育者にとって、研修において学んだことを力量として明示し、待遇に反映させる具体的方法の一つが免許の上進であるといえる。保育者は研修を通して自らの力量を向上させることを強く望んでおり、研修と連動して、2種免許を1種免許に上進する研修制度の拡充が必要であろう。つまり上進する方法を保育者に広く周知することや、上進のための研修機会を十分に提供することが大切である。さらに保育者にも教職大学院で学び、1種免許を専修免許に上進する機会として、教育委員会等から派遣研修できる制度が求められる。同時に、オンラインと対面授業や演習等と組み合わせるなどして、保育者が働きながら大学院で学びを深め、力量形成や専門性を向上することができるあり方を検討しなければならない。

形成：「保育者を続けている理由」からの考察』『北海道大学大学院教育学研究院紀要』134号, 91 - 116頁, 2019年

vi 淀川裕美・箕輪潤子・門田理世・秋田喜代美「園内研修における保育者の学びの構造化に関する試み：心に残った・保育への理解が深まった発言に着目して」『東京大学大学院教育学研究科紀要』, 59巻, 485 - 516頁, 2020年

vii 片岡元子・松井剛太・松本博雄・高橋千代「保育者の行動変容を促す「探究型研修」の検討：研修をデザインする側の視点から」『保育学研究』第58件第2・3号合併号, 381 - 392頁, 2020年

i 専門職の定義は様々あるが、日和恭世は、「①専門職の活動そのものに求められる属性（知的な活動，実践的，技術的），②専門家個人に求められる属性（体系的理論，伝達可能な技術，利他主義），③専門職集団に求められる属性（専門職集団の組織化，テストによる能力証明，倫理綱領，専門職的文化），④社会との関係に影響を受ける属性（社会的承認，専門職的権威，報酬）」の4つとして表に整理している。（日和恭世「専門職としてのソーシャルワークの再検討—専門職の概念に焦点をあてて—」『別府大学紀要』第57号, 2016年, 57 - 66頁）

ii 小川茉莉は、教員教育の「専門職化」について「自律性」の観点から批判的検討を行っている。小川茉莉「教員教育における『専門職化』アプローチの批判的検討—自律性の観点から—」『千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書 日欧におけるコミュニティ形成と次世代育成の課題』第351集 36 - 55頁, 2019年

iii 内田千春「今、幼児教育の担い手に求められるもの—転換期に考える保育者の専門性と養成教育—」『教師教育学会年報』第25号, 48 - 55頁, 2016年

iv Power to the Profession National Task Force (2020), *Unifying Framework for the Early Childhood Education Profession*（このことについては、内田千春「アメリカ合衆国の乳幼児期のケアと教育の現状と研修システムを通じた改革への動き」『保育学研究』第58件第2・3号合併号, 353 - 363頁, 2020年にも紹介されている。）

v 野屋敷結・川田学「保育者としての成長とキャリア